書　　評

田多井吉之介・加藤正明(編)

『日本の自殺を考える』

医学書院，1974年，B5判，214ページ

本書は，“自殺防止行政研究会”が昭和45年から定期的に開催していた研究会の成果を昭和48年7月10日，『日本の自殺を考えるシンポジュウム』で公表し，その論文をまとめたものである．

自殺の研究には，精神医学的，心理学的研究と社会学を中心とする研究の二つの流れがある．本書では，社会学者，教育学者，精神医学者，ソーシャルワーカー等の14名の著者の論文から成り，自殺研究が多角的に取り上げられることによって統合的に自殺の研究がなされている．

本書は，Ⅰ部「日本文化と自殺，その軌跡」，Ⅱ部「日本人の自殺，その考証」，Ⅲ部「東京都の自殺，その現実」，Ⅳ部「自殺は予防できるか」から構成され，Ⅰ～Ⅲ部が自殺の研究，Ⅳ部が自殺の予防について論じられている．

Ⅰ部では，日本文化に個有な自殺について四つの論文があり，1．殉死，宗教的自殺などの日本的自殺が歴史的に文学作品の分析を通して類型化されている．2．ケーススタディによって日本文化と作家の自殺が論じられている．3．情死と親子心中について統計的観察によって，家族周期との関連で論じられている．4．ニュースに出る自殺について，昭和15年から時代状況と自殺の特徴について分析されている．

Ⅱ部では，統計的な分析を中心として三つの論文があり，1．自殺の疫学として，人口動態統計の解析をとおして，性・年齢・地域・季節・手段の年次推移と特性があきらかにされている．2．時代と国民性について，価値体系の変動に着目して，国際比較，民族比較を行なっている．3．家族と自殺に関して，自殺の統計的な多発条件と家族生活という視点から，地域差・職業・性別・家族について分析し，家族周期論と自殺の関連を明きらかにしている．特に後半では，家族生活史を精神医学的視点から「自己実現」と「自殺」との関係で論じている．

Ⅲ部では，東京都の自殺について四つの論文があり，1，東京都区部の自殺の実態を統計的に分析し，自殺の動機，精神病と自殺についても論及している．2．救急車からみた自殺，自殺未遂では，地域・職業・場所等について傾向分析がなされている．3．ある区の自殺の実態では，昭和47年の実態調査をもとに“自殺に関係する因子”表を作成し精密な分析を試みている．4．学園の自殺では，事例研究を手がかりに自殺の実態が類型的にまとめられている．

Ⅳ部では，Ⅰ～Ⅲ部の研究を基礎に自殺の予防について論じられ，1．いのちの電話，2．予防の方法について論じられている．

ところで，人口問題研究と自殺という視点から，1．自殺の実態的統計が豊富であること．2．精密な実態調査が行なわれていること．3．またそれに事例的研究を加えることによって自殺の統計的理解（定量的研究）と内容理解（定性的研究）の統合がなされていること．4．研究の方法的な統合とともに，自殺を家族周期論の視点から論じ，自殺とい統計的数値のいわば背後にある因果関係を理論的に明きらかにしていることが本書の特徴と思われる．それらの諸点は人口問題研究にとって，方法論的に示唆するものが大きいと思われる．

（高橋　重郷）